

サハ語 (ヤクート語) の「双数」の解釈

—聞き手の数からの分析—

江 畑 冬 生

新潟大学

【要旨】 サハ語には2種類の勧誘形がある。一方は主語が双数の場合に、他方は主語が複数(3者以上)の場合に用いられる。「複数形」は双数形に接尾辞 $-(i)\eta$ を付加することで形成される。これに対し命令形では、「単数形」に同じ接尾辞 $-(i)\eta$ を付加することで複数形(2者以上)が形成される。先行研究では主語の数にのみ注目していたため、同一の接尾辞の有無に関して、ある場合には双数/複数の対立として、別な場合には単数/複数の対立として記述される結果になる。本論文では、接尾辞 $-(i)\eta$ は聞き手の複数性を指示するのだと主張する。この新たな分析により、パラダイムの中に部分的に存在していた「双数」という概念を解消できる。当該接尾辞を用いて聞き手の数を区別するのは、勧誘形・命令形・挨拶言葉である。これらには眼前の聞き手に対し強い働きかけを有するという共通点がある。挨拶言葉において聞き手の数が区別されやすくなる現象は、近隣の言語にも観察される*。

キーワード: サハ語, 勧誘, 命令, 挨拶言葉, 数

1. 主張の概要

サハ語の勧誘形には2種類の形式がある¹。一方は主語が双数の時に用いられ(双数形)、もう一方は主語が複数(3者以上)の時に用いられる(複数形)。勧誘形では「双数形」に接尾辞 $-(i)\eta$ を付加することで「複数形」が形成される。ところがこの接尾辞 $-(i)\eta$ は、命令形にも現れる。命令形の場合には、「単数形」に接尾辞 $-(i)\eta$ を付加し「複数形」が形成される。

従来の見方では主語の数にのみ注目していたため、同一の接尾辞 $-(i)\eta$ の有無が、

* 本論文は、日本語学会第145回大会(2013年、九州大学)における口頭発表の内容に基づくものである。口頭発表に際して有益なコメントを下された、故庄垣内正弘先生をはじめとする先生方に御礼申し上げる。本稿の執筆にあたり、多くの貴重な御助言を下された匿名の査読者の方々にも、深く感謝申し上げたい。草稿の段階では、麻生玲子氏と梅谷博之氏からも有益な助言を頂いた。本研究は、JSPS特別研究員奨励費「サハ語名詞句の形態統語的・語用論的研究」(課題番号22-10287)および科学研究費(若手研究A)「チュルク諸語北東グループ未解明言語の調査研究: 包括的記述と史の変遷の解明」(課題番号26704004)の助成を得たものである。本論文のサハ語に関するデータは、筆者による現地調査および筆者の作成したコーパス資料(週刊新聞 *Эдэр саас* 紙および *Кылым* 紙の電子版に基づく)からのものである。¹ サハ語(ヤクート語)はロシア連邦のサハ共和国を中心に分布するチュルク系の言語であり、その話者数は約45万人である。サハ語は膠着的な形態法を有する接尾辞型の言語である。サハ語の接尾辞は、母音調和と頭子音交替により8~16種の異形態を持つことが多い。ただし本論文では、接尾辞の異形態を捨象し代表形のみを示している。

勧誘形では「双数／複数」の対立に対応するが命令形では「単数／複数」の対立を表す結果になっていた。本論文では、当該の接尾辞の有無は聞き手の数に対応すると捉える。この新たな解釈により、接尾辞の有無と意味の対応関係が一貫したものになる。

2. 勧誘形の数

サハ語の勧誘形には、表 1 に示す 2 種類の形式がある。表 1 から明らかなように、2 種類の形式は接尾辞 $-(i)\eta$ の有無による形態的対立をなしている。

表 1 勧誘形

| | 接尾辞 $-(i)\eta$ なし | | 接尾辞 $-(i)\eta$ あり | |
|--------------------|-------------------|---------------------|------------------------------|----------------------------------|
| | 肯定 | 否定 | 肯定 | 否定 |
| <i>bar</i> 「行く」 | <i>bar-uax</i> | <i>bar-um-uax</i> | <i>bar-uax-<u>u</u>\eta</i> | <i>bar-um-uax-<u>u</u>\eta</i> |
| <i>kepsee</i> 「語る」 | <i>kepsee-x</i> | <i>kepsee-m-ies</i> | <i>kepsee-x-<u>i</u>\eta</i> | <i>kepsee-m-ies-<u>i</u>\eta</i> |

勧誘形における接尾辞 $-(i)\eta$ の有無がどのような意味的働きを有するのかわについて、先行研究では 2 つの立場がある。Stachowski and Menz (1998: 426) はこれを包括／除外の区別であると説明する。一方 Korkina (1970: 148) や Ubrjatova et al. (1982: 320) では、双数／複数の違いとして記述している。Ubrjatova (1991) は術語としては包括／除外を用いるが、本文中の記述としてはやはり双数／複数からの説明を行っている²。

以下の例文からも明らかなように、言語事実としては後者の説明が正しい。例えば接尾辞 $-(i)\eta$ を含む例文 (1) について、これを除外形である (すなわち主語に聞き手を含まない) と解釈するのは明らかに不自然である³。

- (1) *aerapsyybylyke baru munnug-u-ttan kyysteex sportsmen-nar*
 共和国 全て 角-POSS.3SG-ABL 力のある スポーツ選手-PL
kel-bit-tere biligin kiniler-i ist-ies-i\eta
 来る-PST-3PL 今 3PL-ACC 聞く-IMP:1PL-IN
 「共和国の各地から屈強なスポーツ選手たちが来た。それでは彼らの話を聞こう」

一方、例文 (2) における勧誘形の主語は「兄と私」の二者である。このような

² Nevskaya (2005) は *minimal inclusive* および *augmented inclusive* という用語を用いて説明する。ただし勧誘を表す場合には、この区別は実質的に双数／複数と同じことになる。この点は 6 節でも議論する。

³ 筆者は、勧誘形および命令形を命令法パラダイムに含めている (グロスには IMP を用いる)。サハ語の命令法は、表 7 に示すように 6 つの人称・数に対応する形式を揃えている (さらに 1PL には、本論文で問題にした 2 形式の区別がある)。本論文で問題にする接尾辞 $-(i)\eta$ には、IN のグロスを用いる。

場合には、接尾辞 $-(i)\eta$ は現れない。

- (2) *ubaaj saa-mu akal iti ah-u*
 兄 :VOC 銃 -ACC 寄越す:IMP:2SG その 食べ物-ACC
kuottar-um-uax
 逃がす-NEG-IMP:1PL
 「[[狩りで] 兄さん、銃をくれ。その獲物を逃さないようにしましょう」

つまり、包括／除外による説明は誤りである。(1)でも(2)でも、主語に聞き手を含むからである。言語事実としては、接尾辞 $-(i)\eta$ 無しの勧誘形は双数主語を表し、接尾辞 $-(i)\eta$ を含む勧誘形は複数主語（3者以上）を表すと結論付けられる⁴。

しかしサハ語文法全体を考えると、この結論にも問題が残る。第1に、サハ語において、「双数」は勧誘形にしか存在しない文法概念である。第2に、勧誘形以外では、接尾辞 $-(i)\eta$ の有無が双数／複数の違いに対応するわけではない。以下では接尾辞 $-(i)\eta$ が用いられる別なケースを観察してから、この2つの問題に対する解決策を提示する。

3. 挨拶言葉

勧誘形以外で接尾辞 $-(i)\eta$ が現れるケースとして、挨拶言葉がある。表2に示すように、サハ語の挨拶言葉では単数／複数を区別する。1人に対する挨拶では単数形が、複数人に対する挨拶では複数形が用いられる。挨拶言葉の複数形は接尾辞 $-(i)\eta$ を含む形式である。

表2 挨拶言葉

| | 単数 (対個人) | 複数 (対多数) |
|-------|-----------------|------------------------------|
| こんにちは | <i>doroobo</i> | <i>doroobo-lor-<u>u</u></i> |
| ありがとう | <i>bahuuuba</i> | <i>bahuuuba-lar-<u>u</u></i> |
| ではまた | <i>pakaa</i> | <i>pakaa-lar-<u>u</u></i> |
| さらば | <i>burahaaj</i> | <i>burahaaj-dar-<u>u</u></i> |

例文(3)に示すように、複数人に対して挨拶する場合には、複数形の使用が義務的である。

- (3) *ehee mexejiil ehee balbaara doroobo-lor-u*
 爺さん PSN 婆さん PSN こんにちは-PL-IN
 「ミハイル爺さん、バルバーラ婆さん、こんにちは！」

⁴ ただしサハ語の勧誘形には、主語の数に関係なく用いることのできる第3の形式 $-(iE)XXE$ も存在する。本節では、例文(1)や(2)のように、あくまで聞き手が眼前に存在する場合の勧誘形について考察している。聞き手が話し手の眼前に存在しない場合、例えば文書などでは、この第3の勧誘形もしばしば用いられる。

なお挨拶言葉を形成する語幹は、すべてロシア語からの借用に由来する⁵。これらの語幹は、サハ語の形態法上では名詞語幹として振る舞う。例えば *bahuuba* 「ありがとう」に出名動詞の派生接辞 *-LEE* を付加して *bahuuba-laa* 「感謝する」が派生される。あるいは (4) のように、挨拶言葉に格接辞を付加することも可能である⁶。挨拶言葉が形態法上で名詞に分類されることは、(3) が動詞文でないことを意味する。

- (4) *stas ulaxan doroobo-to tut*
 PSN 大きい 健康-PART 掴む:IMP.2SG
 「スタス、元気でいろ」(逐語訳:スタス、大きな健康を掴め)

4. 命令形

勧誘形以外で接尾辞 *-(i)ŋ* が現れるもう 1 つのケースに、命令形がある。サハ語の 2 人称に対する命令では、主語の単数/複数を区別する。表 3 から明らかなように、単数形に接尾辞 *-(i)ŋ* を付加することで複数形が形成される。

表 3 命令形

| | 単数形 | | 複数形 | |
|-----------------------|-----------------|---------------------|---------------------------|-------------------------------|
| | 肯定 | 否定 | 肯定 | 否定 |
| <i>bar</i> 「行く」 現在 | <i>bar</i> | <i>bar-uma</i> | <i>bar-<u>uŋ</u></i> | <i>bar-uma-<u>ŋ</u></i> |
| <i>bar</i> 「行く」 未来 | <i>bar-aar</i> | <i>bar-um-aar</i> | <i>bar-aar-<u>uŋ</u></i> | <i>bar-um-aar-<u>uŋ</u></i> |
| <i>kepsee</i> 「語る」 現在 | <i>kepsee</i> | <i>kepsee-me</i> | <i>kepsee-<u>ŋ</u></i> | <i>kepsee-me-<u>ŋ</u></i> |
| <i>kepsee</i> 「語る」 未来 | <i>kepsee-r</i> | <i>kepsee-m-eer</i> | <i>kepsee-r-<u>iŋ</u></i> | <i>kepsee-m-eer-<u>iŋ</u></i> |

命令形では、接尾辞 *-(i)ŋ* は 2PL 主語を指示する。例文 (5) は複文で、従属節の述語も主節の述語もどちらも 2PL 主語を指示している。

- (5) *tuox suuuba-mu bul-lax-xuutu-na miexe*
 何 誤り-ACC 見つける-TEMP-2PL-PART 1SG:DAT
biller-eer-iŋ
 知らせる-IMP:FUT-2PL
 「君たちが何か間違いを見つけたら、私に知らせなさい」

⁵ それぞれロシア語の *здорово, спасибо, пока, прощай* に由来する。サハ語固有の表現には、「こんにちは」「ありがとう」等に直接対応するものは無い。

⁶ 表 2 の複数形における接尾辞 *-lor, -lar, -dar* は、名詞語幹に付加される複数接辞 *-LER* (の異形態) である。複数接辞が付加されるという点も、挨拶言葉を形成する語幹が形態法上で名詞的であることを示唆する。

5. 「聞き手の数」による新解釈

2節から4節で見たように、サハ語の勧誘形・挨拶言葉・命令形には、接尾辞 $-(i)ŋ$ の有無による数の対立がある。従来の研究では、主語の数にのみ注目していた。そのため、勧誘形では双数／複数を区別し命令形では単数／複数を区別する、という不均衡な説明になっている。挨拶言葉については、同一の接尾辞が現れるにもかかわらず、これらの形式と関連付けた説明がなされることはなかった。3節でも述べたように、サハ語の挨拶言葉は名詞的特徴を持つ。つまり挨拶言葉は主語を持たないので、接尾辞 $-(i)ŋ$ の有無を主語の数から説明することはできないことになる。

本論文では新しい解釈として、聞き手の数に着目する。すなわちサハ語ではこれら3つの場合に、1人に対する表現（聞き手が単数の場合）と複数人に対する表現（聞き手が複数の場合）を、接尾辞 $-(i)ŋ$ の有無により一貫して区別するのだと主張する。この新たな解釈により、3つの現象を統一的に説明できるだけでなく、動詞屈折パラダイムにおいて勧誘形のためだけに存在する部分的な「双数」を解消できる。聞き手の数による形式の区別は、Corbett (2000) などの通言語的研究でも報告されていない珍しい現象である。

表4 接尾辞の有無と意味機能の対応

| | 主語の数 | 聞き手の数 |
|---------------------------|-------|-------|
| 勧誘 $-\emptyset/-(i)ŋ$ | 双数／複数 | 単数／複数 |
| 挨拶言葉 $-\emptyset/-LER-Iŋ$ | --- | 単数／複数 |
| 命令 $-\emptyset/-(i)ŋ$ | 単数／複数 | 単数／複数 |

--- は対応関係が無いことを表す

以下ではサハ語の「双数」に関する別の誤解を解いておきたい。サハ語には *bibikki* 「～と私」および *ebikki* 「～と君」という形式がある。この2つの形式は、Ubrjatova et al. (1982: 190) では「双数集合人称代名詞」(двойственно-собирательное личное местоимение) と呼ばれ、Stachowski and Menz (1998: 422) では「集合代名詞」(collective pronoun) と呼ばれている⁷。これらの形式は、次の例文のように用いられる。

- (6) *ubaj-um bibikki olus yær-en sulž-a-but*
 兄-Poss.1SG と私 とても 喜ぶ-CVB いる-PRS-1PL
 「兄と私はとても喜んでいる」

例文(6)における *ubajum* 「兄」を取り除くことは不可能である。*bibikki* 「～と私」

⁷ Nevskaya (2005: 353) では Ubrjatova et al. (1982: 188–190) を参照しながら、やはりこれらの形式を「双数代名詞」(dual collective pronoun) と呼んでいる。本節で筆者が主張したように、これら2つの形式は自立的な代名詞ではない(単独では文の成分として現れない)。なお Stachowski and Menz (1998: 422) では、これら2つの形式に格接辞が後続する例も挙げている。ただし江畑(2004)が示すように、サハ語では一部の後置詞に格接辞が付加されうる。つまり格接辞が付加するからといって、当該の形式を(代)名詞として分析する必要はない。

は常に他の名詞句に後続することから後置詞だと考えるべきであり、これを代名詞と呼ぶのは大きな誤りである(同様に *ebikki*「～と君」も必ず他の名詞句に後続する)。これらの後置詞を含む句が結果的に「双数」を表すのはあくまで意味のレベルのことであり、サハ語に双数代名詞が存在しているわけではない⁸。この点からもやはり、サハ語に「双数」という文法概念を認める根拠は無い。

6. 主語の数から聞き手の数への変遷

5節では、サハ語の接尾辞 $-(i)\eta$ の有無が聞き手の数と相関をなすという議論を行った。本節では他のチュルク諸語との比較により、この接尾辞の通時的変遷を考える。

Róna-Tas (1998) によれば、Proto-Turkic には双数 (dual) が無く、包括 (inclusive) と除外 (exclusive) の対立の痕跡も全くない。Erdal (2004: 231) は、Old Turkic にもやはり包括 (inclusive) が見られないとする。つまり古い段階のチュルク語には、双数あるいは包括といった文法概念は無かったということである。Erdal (1998: 146) は、Old Turkic の命令法において 2PL 主語を示す形式が $-(X)\eta$ または $-(X)\eta\text{lar}$ であることを述べている⁹。本論文で問題にしたサハ語の接尾辞 $-(i)\eta$ は、Old Turkic の命令法において 2PL 主語を指示する形式 $-(X)\eta$ に対応する。

Nevskaya (2005) は、現代チュルク諸語のうちサハ語、ドルガン語、南シベリアのチュルク諸語およびトルクメン語の勧誘形においては、minimal inclusive (すなわち 2sg + 1sg) と augmented inclusive (すなわち 2PL + 1sg) を形態上で区別することを指摘している¹⁰。Nevskaya (2005) の示す勧誘形の区別に加え、命令形の区別も合わせて示したものが表5である。これらのチュルク諸語の勧誘形と命令形のどちらにおいても、聞き手が単数の形式がデフォルトであり、聞き手が複数の形式は Old Turkic の $-(X)\eta$ ないし $-(X)\eta\text{lar}$ に遡る形式が付加されることで形成される。

⁸ 例文では、述語における人称・数の標示が1人称複数になっている。主語が単数であっても述語が複数で一致する現象は、Ebata (2006) でも示したように、共格名詞句が用いられる場合にも起こる。従って一致に「ずれ」が見られるからといって、当該の形式を双数代名詞として分析する必要はない。

⁹ /X/ は /i/, /i/, /ü/, /u/ のいずれかにより実現する母音である。接尾辞 $-(X)\eta\text{lar}$ は $-(X)\eta$ と $-\text{lar}$ (複数接辞) に分析することができる。Erdal (2004: 235) が示すように、Old Turkic の命令法における 1PL 主語を示す形式 (すなわち勧誘形) は $-(A)\text{llm}$ のみであり、双数や包括/除外による区別を持たない。

¹⁰ (術語としては「双数」を用いているものの) 同様の指摘はすでに Rassadin (1978: 224–225) にも見られる。脚注2でも述べたように、勧誘形に限定した場合には、Nevskaya (2005) の術語は双数/複数と実質的に等価である。

表5 現代チュルク諸語の命令形と勧誘形¹¹

| | 聞き手が単数 | 聞き手が複数 |
|--------|---|--|
| サハ語 | <i>illaa</i> 「歌え」 (2SG) <i>il-iax</i> 「取ろう」 (2SG + 1SG) | <i>illaa-ŋ</i> 「歌え」 (2PL) <i>il-iaŋ-ŋ</i> 「取ろう」 (2PL + 1SG) |
| トゥバ語 | <i>čemnen</i> 「食べろ」 (2SG) <i>al-ih</i> 「取ろう」 (2SG + 1SG) | <i>čemnen-ijer</i> 「食べろ」 (2PL) <i>al-ih-iar</i> 「取ろう」 (2PL + 1SG) |
| トファ語 | <i>al</i> 「取れ」 (2SG) <i>al-aah</i> 「取ろう」 (2SG + 1SG) | <i>al-ijar</i> 「取れ」 (2PL) <i>al-aah-ij(ar)</i> 「取ろう」 (2PL + 1SG) |
| ハカス語 | <i>irla</i> 「歌え」 (2SG) <i>al-aŋ</i> 「取ろう」 (2SG + 1SG) | <i>irla-iar</i> 「歌え」 (2PL) <i>al-aŋ-ar</i> 「取ろう」 (2PL + 1SG) |
| トルクメン語 | <i>oka</i> 「読め」 (2SG) <i>al-ah</i> 「取ろう」 (2SG + 1SG) | <i>oka-ŋ</i> 「読め」 (2PL) <i>al-ah-ŋ</i> 「取ろう」 (2PL + 1SG) |

以上のことからサハ語の接尾辞 $-(i)ŋ$ が辿った歴史的変遷には、以下の3つの段階があったと推定できる。

- [1] Old Turkic の命令法において 2PL 主語を指示する形式は $-(X)ŋ$ または $-(X)ŋlar$ であった。
- [2] いくつかのチュルク諸語においては、勧誘形にもこの接尾辞を付加することにより、双数と複数 (Nevskaya (2005) の用語では minimal inclusive と augmented inclusive) を区別するようになった。この段階で接尾辞 $-(X)ŋ$ ないし $-(X)ŋlar$ に遡る形式は、勧誘形ではもはや 2PL 主語を指示するとは言えなくなる¹²。
- [3] サハ語では接尾辞 $-(i)ŋ$ が聞き手の複数性を表す接尾辞として機能するようになり、挨拶言葉にもその用法が拡張した。挨拶言葉がロシア語起源である点か

¹¹ 各言語の勧誘形は、Nevskaya (2005) から引用した。ただしトゥバ語の勧誘形については Nevskaya (2005) に誤りがあるため、筆者自身が行ったフィールドワークによるデータを用いた。各言語の命令形は、トゥバ語について Anderson and Harrison (1999) を、トファ語について Rassadin (1978) を、ハカス語について Baskakov (1975) を、トルクメン語について Clark (1998) を参照した。キリル文字表記からの転写については Nevskaya (2005) に従った（そのため表5中のサハ語表記は本論文中の音韻表記とは若干異なる）。Nevskaya (2005) が取り上げたチュルク諸語のうち、本論文ではドルガン語・アルタイ語・シオル語を取り上げなかった。Nevskaya (2005) のドルガン語データも誤りを含む可能性が大きい。例えばドルガン語の勧誘形として *al-iaq* 「取ろう」を示しているが *il-tak* とすべきであろう。アルタイ語・シオル語についてはいくつかの方言の変種が同時に扱われているため、煩雑さを避け本論文では割愛した。

¹² 匿名査読者からの指摘にもあったように、チュルク諸語のうち一部だけに形式の区別が生じたことの引き金として、言語接触の可能性が考えられる。たしかにウラル語族のサモイェード諸語には双数の文法カテゴリが存在するし、ツングース諸語のエヴェンキ語などには1人称代名詞に包括／除外の区別が存在する。しかしながらサモイェード諸語における双数は動詞の屈折パラダイム全体にわたるものであり（例えばガナサン語について Helimski (1998) による）、命令形と勧誘形に限られるチュルク諸語の場合とは事情が異なっている。また一部のツングース諸語の代名詞における区別は包括／除外によるものであり（例えばエヴェンキ語について Nedjalkov (1997: 196) による）、やはりチュルク諸語とはタイプの異なるものである。従って現時点において筆者は、一部のチュルク諸語の命令形と勧誘形に見られる形式の区別が言語接触により生じたものだと考えていない。

ら見て、この拡張が起こったのは早くても 17 世紀である¹³。

勧誘・命令・挨拶言葉はいずれも、(直説法などとは異なり) 眼前の聞き手に強く働きかける表現であるという点で共通する。この特徴は、サハ語の接尾辞 $-(i)ŋ$ によって聞き手の数を区別するのが、これら 3 つの表現においてのみであることの背景要因として有力である。次節ではこの点を、近隣の諸言語との対照から論じたい。

7. 近隣諸言語との対照から見る眼前の聞き手への働きかけ

まずはモンゴル語との対照を行う。モンゴル語には接尾辞 $-tsgaa$ があり、栗林 (1992: 511) では衆動態を作ると説明される。接尾辞 $-tsgaa$ は Kullman and Tserenpil (2008: 134) では “many people (usually more than two) are involved in the action” と記述され、主語の複数性を含意する。ただしモンゴル語の接尾辞 $-tsgaa$ の使用は、(サハ語の場合とは異なり) 命令や勧誘に限られるものではない。また Kullman and Tserenpil (2008: 134) も指摘するように、主語によりすでに複数性が示されているならば接尾辞 $-tsgaa$ は現れなくとも良い。次の例文も同書からの引用である。例文 (7) のような直説法では、主語が複数の時に接尾辞 $-tsgaa$ を用いても用いなくとも良い。

- (7) *ted öcigdör jav-(tsgaa)-san*
 3PL 昨日 行く-(COLL)-PST
 「彼らは昨日行った」

一方で梅谷博之氏の私信によれば、挨拶ではこの接尾辞の使用は聞き手の数と対応するという。すなわち、聞き手が単数であれば (8) が、聞き手が複数であれば (9) が用いられる¹⁴。山越 (2012: 263) も接尾辞 $-tsgaa$ について「あいさつや勧誘の表現でよく耳にする」ことを指摘している。

- (8) *sajn baj-na uu*
 良い である-PRS か
 「[あなたは] 元気ですか？」
- (9) *sajn baj-tsgaa-na uu*
 良い である-COLL-PRS か
 「[みなさん] 元気ですか？」

¹³ 挨拶言葉にすでに複数接辞が付加されているのに、さらに接尾辞 $-(i)ŋ$ が付加され聞き手の複数性を示すことは余剰的 (redundant) である (匿名査読者からの指摘)。現時点で筆者はこの疑問に対する明確な答えを持っていないが、眼前の聞き手が複数であることを示す形式 $-(i)ŋ$ が、単なる複数性を表す形式に加えて必要とされたという動機づけを背景にした可能性がある。

¹⁴ サハ語の場合とは異なり、ここに示したモンゴル語の挨拶は動詞文である。従ってこれらの文の聞き手は、同時に主語でもある。

トゥバ語の挨拶言葉においても、聞き手の数により異なる言語表現が用いられる。聞き手が単数であれば (10) が、聞き手が複数であれば (11) が必ず用いられる。

(10) *ekii*

良い

「こんにちは！」

(11) *ekii-ve-ŋer*

良い-Q-2PL

「みなさんこんにちは！」

前節の終わりでは、勧誘・命令・挨拶言葉のような眼前の聞き手に強く働きかける表現において聞き手の数を区別するのは、直説法のような働きかけのない場合と比べて、聞き手の数が言語構造に影響を与えやすいことが背景要因にあるのだと指摘した。少なくとも挨拶言葉については、モンゴル語およびトゥバ語のデータからも筆者のこの主張を裏付けることができる¹⁵。

表6には*kel*「来る」を例として、サハ語の直説法のパラダイムから近過去と結果過去の諸形式を示す。直説法においては、3SGの標示がゼロ形態である。一方表7には同じく*kel*「来る」を例として、命令法のパラダイムから現在肯定と現在否定の諸形式を示す。命令法においては、2SGの標示がゼロ形態である。つまりサハ語では、眼前の聞き手への働きかけのない直説法では3人称が形態的に無標であるが、眼前の聞き手への働きかけが強い命令法では聞き手である2人称が形態的に無標ということになる。

表6 直説法のパラダイム（近過去および結果過去）

| | | | |
|-----------------|-------------------|--------------------|--------------------|
| <i>kel-li-m</i> | <i>kel-li-bit</i> | <i>kel-bip-pin</i> | <i>kel-bip-pit</i> |
| <i>kel-li-ŋ</i> | <i>kel-li-git</i> | <i>kel-bik-kin</i> | <i>kel-bik-kit</i> |
| <i>kel-le</i> | <i>kel-li-ler</i> | <i>kel-bit</i> | <i>kel-bit-ter</i> |

3SG がゼロ形態で無標

表7 命令法のパラダイム（現在肯定および現在否定）

| | | | |
|----------------|-------------------------------------|-------------------|---|
| <i>kel-iim</i> | <i>kel-iex</i> <i>kel-iex-ij</i> | <i>kel-im-iim</i> | <i>kel-im-iex</i> <i>kel-im-iex-ij</i> |
| <i>kel</i> | <i>kel-ij</i> | <i>kel-ime</i> | <i>kel-ime-ŋ</i> |
| <i>kel-lin</i> | <i>kel-linner</i> | <i>kel-be-tin</i> | <i>kel-be-tinner</i> |

2SG がゼロ形態で無標

¹⁵ たしかにモンゴル語では、直説法でも挨拶でも同じ接尾辞 *-tsgaa* が現れる。しかし本節でも述べたように、その使用の義務性において違いが現れている。ただしモンゴル語の挨拶において、接尾辞 *-tsgaa* の使用が義務的か否かに関しては研究者や母語話者の間で判断に揺れがあり、さらなる検討を要する。

8. まとめ

本論文ではサハ語の勧誘形・命令形・挨拶言葉に現れる接尾辞 $-(i)\eta$ について、以下のことを主張した。

記述的観点からは、接尾辞 $-(i)\eta$ の有無が聞き手の単数／複数に対応するものであることを示した。この新しい解釈は、動詞パラダイム中で部分的にのみ存在する「双数」の概念を解消するものである。なお一部先行研究に見られる包括／除外による説明は、言語事実に即したのではなく誤りである。先行研究において「双数代名詞」として言及される *bibikki* 「～と私」および *ebikki* 「～と君」は、その文法的振る舞いからは後置詞と呼ぶべきである。これらの形式は単に意味的に2者を表すのであり、「双数」を表す自立的な代名詞が存在しているわけではない。つまり「双数」という文法概念は、サハ語の記述には必要ない。

歴史的観点からは、接尾辞 $-(i)\eta$ の変遷について考察した。当該の形式は Old Turkic では 2PL 主語の命令形に用いられるものであったが、いくつかのチュルク語では勧誘形にも用いられることになり 2PL 主語専用の形式とは言えなくなった。さらにサハ語では挨拶言葉にも用法が拡張し、複数人の聞き手を指示する形式となった。

モンゴル語およびトゥバ語においても、挨拶言葉において聞き手の数を区別する。これら近隣の言語との対照を通して、眼前の聞き手に強く働きかける表現においては、直説法などの聞き手への働きかけのない表現と比べ、聞き手の数が言語構造に影響を与えやすいと主張した。

略 号

ABL 奪格, ACC 対格, COLL 衆動, CVB 副動詞, DAT 与格, FUT 未来, IMP 命令法, NEG 否定, PART 分格, PL 複数, POSS 所有, PRS 現在, PSN 人名, PST 過去, Q 疑問, SG 単数, TEMP 時, VOC 呼格

参 考 文 献

- Anderson, Gregory David and K. David Harrison (1999) *Tyvan*. München: Lincom Europa.
 Baskakov, N.A. (1975) *Grammatika xakasskogo jazyka*. Moskva: Nauka.
 Clark, Larry (1998) *Turkmen reference grammar*. Wiesbaden: Harrassowitz.
 Corbett, Greville G. (2000) *Number*. Cambridge: Cambridge University Press.
 Ebata, Fuyuki (2006) Animacy in the expressions of accompaniment in Yakut (Sakha). Hiromi Yoshida and Yasuhiro Kojima (eds.) *Animacy in languages*, 1–13. 21st Century COE Program DALs.
 Erdal, Marcel (1998) Old Turkic. Lars Johanson and Éva Ágnes Csató (eds.) *The Turkic languages*, 138–157. London/New York: Routledge.
 Erdal, Marcel (2004) *A grammar of Old Turkic*. Leiden/Boston: Brill.
 Helimski, Eugene (1998) Nganasan. Daniel Abondolo (ed.) *The Uralic languages*, 480–515. New York: Routledge.

- Korkina, E.I. (1970) *Naklonenija glagola v jakutskom jazyke*. Moskva: Nauka.
- Kullmann, Rita and Dandii-Yadamyn Tserenpil (2008) *Mongolian grammar*. Fourth revised edition. Ulaanbaatar: ADMON.
- Nedjalkov, Igor (1997) *Evenki*. New York: Routledge.
- Nevskaya, Irina (2005) Inclusive and exclusive in Turkic languages. Elena Filimonova (ed.) *Clusivity: Typology and case studies of the inclusive-exclusive distinction*, 341–358. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Rassadin, V.I. (1978) *Morfologija tofalarskogo jazyka v sravnitel'nom osveščenii*. Moskva: Nauka.
- Róna-Tas, András (1998) The reconstruction of Proto-Turkic and the genetic question. Lars Johanson and Éva Ágnes Csató (eds.) *The Turkic languages*, 67–80. London/New York: Routledge.
- Stachowski, Marek and Astrid Menz (1998) Yakut. Lars Johanson and Éva Ágnes Csató (eds.) *The Turkic languages*, 417–433. London/New York: Routledge.
- Ubrjatova, E.I., E.I. Korkina, L.N. Xaritonov, and N.E. Petrov (eds.) (1982) *Grammatika sovremennoego jakutskogo literaturnogo jazyka. Fonetika i morfologija*. Moskva: Nauka.
- Ubrjatova, E.I. (1991) Ešče raz ob isključitel'nosti (ekskljuzive) i vključitel'nosti (inkluzive) v jakutskom jazyke. E.I. Ubrjatova and M.I. Čeremisina (eds.) *Jazyki narodov Sibiri*, 3–11. Novosibirsk: Nauka.
- 江畑冬生 (2004) 「サハ語（ヤクート語）の後置詞」林徹・梅谷博之（編）『チュルク系諸言語における接触と変容のメカニズム』1–16. 東京大学 人文社会系研究科・文学部 言語学研究室.
- 栗林均 (1992) 「モンゴル語」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典 第4巻』501–517. 東京：三省堂.
- 山越康裕 (2012) 『詳しくわかるモンゴル語文法』東京：白水社.

執筆者連絡先：

〒 950-2181

新潟市西区五十嵐 2 の町 8050

新潟大学人文学部

e-mail: ebata@human.niigata-u.ac.jp

[受領日 2015 年 11 月 16 日

最終原稿受理日 2016 年 11 月 29 日]

Abstract**A New Analysis on Sakha “dual” Marking:
An Indicator for a Group of Hearers**

FUYUKI EBATA

Niigata University

Sakha has two forms in the hortative, one of which is used when the subject is in dual (two) and the other is used when the subject is in plural (more than two). The “plural” is formed by adding the suffix $-(i)\eta$ to the “dual.” This suffix also appears in the imperative; however, in this case, the “plural” (more than one) is formed by adding the same suffix to the “singular.” Previous studies have only focused on the number of subjects and result in an inconsistent analysis, where the suffix $-(i)\eta$ correlates with a dual/plural opposition in one case and a singular/plural one in another. However, this study provides a new analysis that proposes that the suffix $-(i)\eta$ should be considered as an indicator for a group of hearers, dissolving the “dual” category. The number of hearers is distinguished in the imperative, hortative, and greeting expressions because these expressions have a strong interaction with the addressee. Some neighboring languages are also sensitive to the number of hearers in greeting expressions.